

第20分科会

特別支援教育コーディネーターの専門性 特別支援学校のセンター的機能を活用した取組 ～個に応じたサポート体制づくり～

新潟県柏崎市立鏡が沖中学校 養護教諭 寺澤 むつみ

I 実践にあたって

5年前の当校は、生徒の心が荒れていて生徒指導上の問題を多く抱えていた。それに加え、どの学年にも多くの不登校生徒がおり、学校の中は落ち着かなかった。そこで、「原因は何か」「この状態をどうするか」全職員で何度も話し合いを重ねた結果、問題行動を起こしたり、不登校になったりする生徒は、何らかの「困り感」を抱えていることが分かった。しかし、その「困り感」に対する対応を見つけることが難しく、対応に苦慮していた。このような生徒に対して、学校だけでなく保護者もどのように関わればよいのか分からず、四苦八苦していた。

そこで、「困り感」や障がい特性が顕著で他の生徒とトラブルを起こし、それが原因で不登校に陥った生徒に対しては、「校内特別支援対策委員会」で時間をかけて検討し、チームで対応することとした。委員会で検討を重ねた結果、生徒一人一人が抱えている問題が違うため、個に応じたサポート体制を作ることの必要性を痛感した。

そこで、柏崎市内にある新潟県立柏崎特別支援学校のセンター的機能を活用し、個に応じたサポート体制づくりを構築した。

II 実践内容

- ・職員研修の開催
- ・保護者サポート（教育相談）の積極的推進
- ・中学校区の保護者を対象に「子育て塾」（家庭教育）の計画的な開催
- ・柏崎市スクールサポート巡回相談における小学校を含めた中学校区での活用
- ・特別支援対策委員会への参加と助言
- ・アドバンス（不登校生徒対象に行う援助する教室）との連携

III 成果と今後の課題

1 成果

- ・個に応じたサポート体制が必要なことが全職員で共通認識され、授業や掲示物にユニバーサルデザインの考えが導入された。その結果、生徒が教師の異なる対応で困っていることを率直に訴えることができるようになり、学校内が落ち着き生徒指導上の問題が漸減した。
- ・保護者にも個に応じた指導の大切さが理解され、特別支援学級への入級者が増えた。また、保護者が我が子をどのように支援すればよいのかが具体的になり、家庭内でのトラブルも減少した。
- ・「子育て塾」の開催により、保護者に発達障害などの理解が深まり、偏見や誤解が解消されたことで保護者間のトラブルが減少した。
- ・校区内の小学校と連携し、中学校での体験入学や小学校に出向いて特別支援学級の説明会を行った。これにより中1ギャップが改善され不登校生徒が減少し、新たな不登校を生まない取組へと発展した。
- ・特別支援学校高等部の概要が保護者に理解され、本人の特性を理解した上で進路決定ができた。進学先の特別支援学校と事前の情報交換も十分にできた。
- ・生徒、保護者や学級担任のニーズにあったサポート体制を築くことができた。
- ・関係機関と連携することで特別支援教育コーディネーターは自信をもって体制を構築することができた。

2 課題

- ・特別支援学校との連絡などを取り合うのに時間がかかる。学級担任や教科担当はいわゆる「空き時間」が少ないため、連絡や相談がなかなかできない。連絡がスムーズにいくシステムを考える必要がある。
- ・「情報を収集する力」「問題を明確化する力」「ゴールを見立てる力」「チームの役割分担を明確にし、まとめていく力」など、コンサルテーションする力が必要である。これら能力をどのように身に付けていくか、コーディネーターとしての研修を深める必要がある。
- ・個別の支援を必要とする生徒が増えてきているので、異動等で職員が変わっても、「個に応じたサポート」が継続されるような学校体制を作る必要がある。